

ライフ
ストーリー

トクヤマ リュウセイさん
(2019年3月国際学部卒業)

居場所探し

【りゅうせいくん】

トクヤマリュウセイです。関西学院大学国際学部で2019年卒業しました。今は、大阪の繊維関係の専門商社に勤めていて、今年社会人4年目になります。セクシュアリティはゲイです。少生まれは香港で、14歳までは香港に住んでいて、中学3年の時に大阪に来ました。留学期間を除いて、今年で日本在住10年になります。趣味は水泳とダンス。ボードゲームも好きです。

ゲイの自覚について

【インタビュアー】

初めてゲイを自覚した時とか、そういう時期ってはっきりしていますか？

【りゅうせいくん】

何かゲイっていうくくりでは自覚してなかったのですが、でも普通の子とは違うなというのは何か物心付いた頃には感じていて。やはりそのきっかけは、同性の友達がレンジャー系とか、遊戯王とか、カードゲームとか、ベイブレードとかそういうのに興味持っていたのに対して、自分は魔法少女系とか、誰も傷付かない系のアニメが結構好きで、それがたまたま女子が好きなアニメというくくりから来て、かなり中性的なタイプなのかなとは思っています。

でも、そのときは趣味が女の子よりであったとしても、恋愛対象は女の子だと思っていたという感じです。小学校では誰々が好きとかは、女の子でした。中学になってから何かどんどん、“あれ？何か普通の子と違う”ということでは片付かないようになって、はっきりとは覚えてないのですが、新聞で上半身裸の男性を見て少しキラキラした物を感じて、“なんか、おかしいな、でももっと見たいな”というのがあって、気が付けば男性同士のAVとか、そういうコンテンツに興味があって。でもやっぱりそのゲイのイメージがあんまりよくなかった環境だったので、何か嫌いになろうとしていま

した。自分自身が認めたくなかった。分かっていたけど認めたくなかったという感じがありました。意外でしょ？

【インタビュアー】

今を見ているとすごく意外。

【りゅうせいくん】

今、だいぶさらけ出していますけど、幼少期は意外と我慢していたというか、口下手な性格だったので、何かどう表現をすれば良いかが分からなかったですけど、自分のこととか、良いことも悪いことも全て回りに合わせたところがありました。

【インタビュアー】

どちらかと言うと自分では肯定したくないけど、「見たいな」そういう葛藤期みたいなことがあったってこと？

【りゅうせいくん】

そうですね。ありましたね。特に自分は思春期の 12、3 から 16、7 まで。友達とかにカミングアウト出来たのも、大学 2 年からで、それまでは割とほとんどのゲイが言う「少しセクシュアリティで迷っている」とか「バイ」とかそういうこと言っていましたけど、「やはりゲイかな？」とか、それを認めるというか受け入れるようになったのは 18 とかのときです。

【インタビュアー】

カミングアウト前に自分がセクシュアリティに迷っているみたいな自覚はありましたか？

【りゅうせいくん】

迷うようなことはなかったのですね。ただ、認めたくないだけみたいなのがあります。

【インタビュアー】

それは友達に相談したりとかはしていましたか？

【りゅうせいくん】

相談しなかったですね。もう「お前は絶対こうだろう」というていので、だからその「あなたがゲイなの？」と言うとか、前提が違うとか、もうゲイだからしゃあないのよねみたいな。だから「もしかしてゲイなの？」と言う訊かれ方はあんまりなくて、だから段階としては、割と進んでいたほうなのかな。周りは多分自分より分かっていたような気がします、セクシュアリティに関しては。すごい女っぽいし、すごい物腰柔らかいから、“おそらく”みたいな断定で、自分だけ認めてなかったみたい。

【インタビュアー】

それはいつぐらいの時ですか？

【りゅうせいくん】

小学校から多分みんな気付いていたような気がします。何か結構ガリッシュとか言われていましたし。

香港にいたときに海外勢と日本人勢とかあったのですが、その海外のほうは割とそのオープンというか受け入れてくれる体制があって、だからあんまり失礼なこととか聞かれたりしなかったのですが、日本人グループとかにはオカマとかオネエとかそういうのはよく言われて、“すごいきつかったなあ”とかはありました。特に小学校低学年の時は、結構静かなタイプだったので、いじめの対象とかはなりやすかったです。その物理的というよりとかは、その言葉的な感じとか、雰囲気です。少しそういうイケズなこととかはされていたのかな。はい、今、思えば。そのときは気付かなかったのですが。

【インタビュアー】

すごい環境が面白いよね。香港勢と日本勢があって、それぞれの対応の仕方が違う。

【りゅうせいくん】

うん、ですね。海外だからってイコール視野が広いっていう言い方はしたくはないですけど、でも何か明らかな違いはそのときは感じていました。

【インタビュアー】

なるほど。じゃあ小学校の時とかは、香港勢の人とも絡むことがあるし、日本勢の人とも絡むことがあるという感じですか？

【りゅうせいくん】

そうです。低学年のときは絡むしかないみたいな。でも日本人勢の中でも仲良い子と仲悪い子がいたので、別に日本人全員が悪いって訳ではなく、ちょっと面倒くさい人たちが多かったかなって感じはしました。

【インタビュアー】

なるほど。自分であまり認めないと言ったら変かもしれないけど、そういう葛藤みたいなものがある中で、大学に入学するときとかはセクシュアリティを考えたりはしましたか？

【りゅうせいくん】

大学入ってからすごく気が楽になりました。学部が国際色の強い学部だったので、どういうバックグラウンドの子でも受け入れるよという雰囲気もありましたし、少人数の授業とかが多かったので、すごいアットホームな雰囲気があったので、「言ってもいいのかな？」という感じはあったので、そこからカミングアウトする練習みたいな。

初めてのカミングアウトについて

【インタビュアー】

初めてカミングアウトしたときのことと違って覚えていたりしますか？

【りゅうせいくん】

うーん。でもちゃんと言葉にしているのは男友達でした。

【インタビュアー】

そうなんだ。

【りゅうせいくん】

この子達はそもそも恋愛対象と見ていないし、何言っても「ふうん」とかそんな感じで言ってくれそうな感じ。だからすごい言いやすかった。

その次には、同じ学年の女の子に言って、そこから先輩とか色んな人に。全員は流石に無理でした。言っても批判しなげそうな人たちに言っていました。今は「オカマよ」とか全然言いますけども。

【インタビュアー】

その男友達に初めてカミングアウトしたというのは、大学の時？

【りゅうせいくん】

大学の時ですね。普通に勉強していたときに少し雑談みたいな時間があって、少し口が滑ったと言うか、「もしかしたら男の子の好きかもしれへん、でも分からへん」みたいなことは言ったのが最初カミングアウトでした。

【インタビュアー】

そのときは相手の反応とかはどうだったの？

【りゅうせいくん】

「ああ、そうなんや。初めてやわ。でもいいか」みたいな。

【インタビュアー】

あ、そうなんだ。

【りゅうせいくん】

でも、かと言って色眼鏡とかかけた、そういう壁とかは感じなかったです。言った後も。

【インタビュアー】

そのとき自分の気持ちに何か変化みたいなものはあった？

【りゅうせいくん】

そうですね、言わなくてもよかったかもしれへんけど、でも言って後々いろいろ楽になりました。プライベートの話をしたときに、その恋愛とか下ネタとかそういう話どうしても入るのですよ。やはりカミングアウトしたおかげで、そういうのが何か嘘つかずにすむのが気が楽。それがやっぱり何か気持ちがいいと言うか何かスッキリする。同じゲイでも男と女と入れ替えて自分のタイプとかは、そういう恋愛感とか言う人もいますけど、何かあまり自分は不器用なので、そういうのは出来なくて、結果的にマッチョが好きとか言っていますけどね。

【インタビュアー】

言っているね。(笑)

【りゅうせいくん】

その代わり期待しなくていいよみたいな。全然タイプじゃないからと言って。

ノンケの困ったところ

【インタビュアー】

そのお友達に言って、そのあと女友達に言った？

【りゅうせいくん】

そうですね。女友達のほうは言いやすいですけど、結果的に女友達に言うてる率のほうが、今、高いので。求められるものもなんとなく高いような気がします。なんかオシャレでなくてはいけないとか、すごく物事にセンシティブ。その女子的な要素。自分もセンシティブなほうですけど、でもなんか流石に全部は把握していないので、「なんでこんなこと知らんの？」と言われても、「いや知らんし」とか、結構そういう絡みが来たときには面倒くさいなとか。

ゲイ友欲しかったんだって言われて、でもそれ褒めているのか、それとも何かコマとして使われているのか良く分からなくて。そういうことを言われるのは結構女性が多くて、今は別に言われても何も思わないですけど、大学時代は結構嫌でしたね。

【インタビュアー】

よく大学のときは「ゲイ友が欲しかったんだ」みたいな絡みをされたりした？

【りゅうせいくん】

されてましたね。それは日本人とか海外勢問わずいましたね。

【インタビュアー】

なんか「求められているもの」って話をしていたけど、それは「あなたがゲイだからこれが好きでしょう」とか、「ここまで出来るでしょう」みたいな感じで求められたってこと？

【りゅうせいくん】

なんやろう。ちょっとした召し使的な感覚。男やけど、でも、その女性的な悩みとか女性的な感覚を理解しているという部類で、何か色々聞かれたり、求められたりするのですが、でも自分は男やし。そう言うのを分からへんしみたいな。例えばですけど、男が好きそうな化粧の仕方とか、そういうの知らんしみたいな。自分化粧はしないしとか、あと「いい男を紹介してよ」と言われたり、「イヤ、逆に紹介して」とか。そういう絡みがちょっと女性とカミングアウトするときに起こりうることかな。

【インタビュアー】

なるほど。

【りゅうせいくん】

でも、今はそれでイライラすることはないです。自分も化粧とか、より女性のセンスとかを仕事上少し勉強しないとイケないので、今は答えられるようになりましたけど。でも、今は、カミングアウトした時にイラっとするのは、「あなたがどういう人でも私は受け入れるよ」と言われる時です。その理由として、何か聞こえはいいじゃないですか。でもそれって、あなたがどんな人間でも私は許してあげるよというか、上から目線な感じがして。

【インタビュアー】

あっちが受け入れてあげる云々の話じゃなくて、そもそも上からだよねと言う感じ？

【りゅうせいくん】

そうそう。

【インタビュアー】

なるほど。

【りゅうせいくん】

うん。ごめんなさい。話しぶずれましたよね。

【インタビュアー】

いや、非常に面白いと思う。大学生活でやはりリアリティのある話とか、外から見ても分からないものっていうのは、やはりインタビューとかで聞いて分かることも沢山あるし。

【りゅうせいくん】

うん。そうですね。

就職活動について

【インタビュアー】

今回、カミングアウトとその就職活動とかそういうのを軸に、ストーリーを作ろうとっていて、そこにまつわるエトセトラなんかを聞けるとすごくいいなという感じです。

【りゅうせいくん】

そうですね。何かゲイだからこういう軸で仕事を探していたというつもりはなかったんですけど、新卒時では。言われてみれば英語を喋れる環境で多様性のある環境がよかったので、そういう意味では IT 係とか、外資系をよく見ていました。ただ、業界的に自分と合わなかった。最初に就職したところは辛かったので、結局就職活動で失敗した組みなのですね、言っちゃえば。いろいろチャレンジして色々な業界にも視野を広げて内定も新卒の時に一回貰ったんですけど、でももらった業界は飲食業界で、あんまりときめかなかったんですよね、そのとき。そこしか内定もらってなかったんですけど、そこを蹴って、卒業してからも就職活動を続けて、何とか今の仕事に繋がったんですけど、そのファッション業界に、扱っている商材が婦人服で、男手が必要で若い子が必要で英語が出来る人が必

要という項目にたまたまフィットして、言っちゃえば何か自分とすごい相性の良い職種だったのですよね。だから結果的に自分が選んだというよりは、企業が選んでくれたと感じがします。結果的に。

【インタビュアー】

就職活動をするときって何かセクシュアリティに関わることを考えたりとかそういうことはあった？

【りゅうせいくん】

日本の会社も受けていましたけれど、あまり行く気にはならなかったですね。そのお酒の席で、下ネタとか男のノリとか少し年功序列のきつい環境にいと、自分の答えたくないこととか我慢しないといけないところが、仕事以外のところに出てきそうな気がしたのですよ。だからそういうところはあえて選ばなかった。例えば、ちょっと思いつかないですけど、でも商社とかは最初少し避けていました。海外とすごい取引の多い業界ですけど、でもやっぱり組織的にはすごくドメスティックなところもありますし、特に工場とか、そういう国内の取引先となるとすごく日本の縦社会の強い部分があるので、それは消去法として自分は無理かなと思ってました。でも、結局商社に入ったのですけどね。その商社でなんで3年間働けたかと言うと、社長さんが海外の人だったというのと、インターナショナル・スクール出身なので、割とオープンマインドな人だったのです。自分のバックグラウンドに関して、周りの人もなんか似たような人が集まるので割りと言いやすいし、会社の人と恋バナしていたときもありましたし、女性社員が多かったというのも魅力的だったのかも知れないのです。男性が多すぎると緊張する。

【インタビュアー】

緊張する。

【りゅうせいくん】

その全員がとか無理とかそういうのじゃなくて、ただ警戒しちゃう。

【インタビュアー】

警戒するのは縦社会を感じるっていう感じ？それと何かセクシュアリティに関わることとかあるのかな。

【りゅうせいくん】

両方かな。

【インタビュアー】

両方。

【りゅうせいくん】

でも、どっちかと言うとそのセクシュアリティのほうが強い。男のほうが強い。最初男友達にカミングアウトしたと言いましたけど、でもそれでもやはり男性がその同性愛者を嫌う確率が高いので、どこまでオカマ感を出してもいいのかが分からなくて。オカマ感イコール自分らしさを出していいのかが分からないから、緊張とか警戒しちゃう。あんまりないですか？そういうの。固まっちゃう。今の会社の社員さんは、男性社員は全員結婚しているのだから発展はないなという感じかな。

【インタビュアー】

発展はない？

【りゅうせいくん】

その恋愛的な発展とか。あとは変な飲みに誘われるとかないので。

【インタビュアー】

なるほど。

【りゅうせいくん】

楽です。

【インタビュアー】

その大学のときに飲みに誘われるみたいな経験はあった？

【りゅうせいくん】

なんかそのサークルの集まりとか、テスト期間が終わったとかその学期が終わった打ち上げみたいな感じではあるのですが、その毎週のように飲み散らかすとかはしてなかったのです。

【インタビュアー】

なるほど。

【りゅうせいくん】

意外にいい子していましたよ。

【インタビュアー】

いい子やね。

発展場について

【りゅうせいくん】

いい子じゃないのは 17 の時から発展場に行きだしたことぐらいかな。

【インタビュアー】

17 と言うたら大学生の時かな。

【りゅうせいくん】

高校卒業したて。

【インタビュアー】

高校の卒業とき。早いよね。すごく。

【りゅうせいくん】

うん。何かもうガマン出来なかったのですよね。経験をしたかったのですよね。初めての人を誰かを全然覚えてないのですよ。

【インタビュアー】

うん、うん。よくあるよね。初めてのは。

【りゅうせいくん】

そうなのです。ツラミ。

【インタビュアー】

高校の時は誰にもカミングアウトはしてなかったよね？

【りゅうせいくん】

自分からはしていませんね。何か周りが気付いてたような感じはしませんけど。

【インタビュアー】

うんうん。その発展場までどうアクセスしていくの？

【りゅうせいくん】

もうネットで調べて、友達誘って行くわけじゃないですか。もうめっちゃ怖かったですけど、一人で行きました。ヤバかったらもう逃げようという気持ちで入って、たまたま相手が居て、やり方は分からなかったけれど、

とりあえず串刺しにされ、痛いのか気持ちいいのか、気持ち悪いのかよく分からないのですけれど、こんな感じなのかなみたいな。

【インタビュアー】

うん、うん。

【りゅうせいくん】

っていう状態ですかね。何が良いセックスか、何が悪いセックスかも分からないけれど、でも、とりあえずやることはやったという感じでした。

【インタビュアー】

その時何か自分の中に変化とかはあった？気持ちの変化とか認識の変化など。

【りゅうせいくん】

何か罪悪感とか生まれるかなと思ったのですよ。

【インタビュアー】

うん。

【りゅうせいくん】

その、汚れたとか恋愛対象として得られなくて、どちらかというとはばずれとか、バイ菌みたいに見られるのかなと思ったのですけれど、でも、意外と言わなかったら誰も分からないし、やったことによって思ったより罪悪感もなく、むしろもっと上手になりたいという気が。そっちの気持ちになったので。

【インタビュアー】

何かスポーツ選手みたいですね。

【りゅうせいくん】

アスリート(笑)。

【インタビュアー】

アスリートというか(笑)。

【りゅうせいくん】

何で上手になりたいかという、いざ本当に好きな人と出会ったときにロマンティックにしたい。

【インタビュアー】

うん。

【りゅうせいくん】

何かぎこちない感じでやるのが自分のイメージなかったの、だから、結構行きまくっていました。

【インタビュアー】

うん、うん。

【りゅうせいくん】

今年も行きましたけど、でも、数えるぐらいですね。(笑)

【インタビュアー】

そうかその時はもう大阪に居て。

【りゅうせいくん】

大阪です。

【インタビュアー】

なるほど。ゲイのコミュニティとかそういうところに出たのは発展場が初めてってこと？

【りゅうせいくん】

発展場の前は実はあるのですが、コミュニティ、あちよつと。

ロールモデルとの出会い

【インタビュアー】

あっコミュニティでもなく、例えば、ゲイの人と初めて自分が認識しているゲイの人に会ったとか。

【りゅうせいくん】

何か自分のメンターになった人は、高校二年の時に居ました。

【インタビュアー】

メンター？

【りゅうせいくん】

メンターというか、ゲイとしてこうあるべき姿じゃないけど、ゲイでもそこまで不自由じゃないよと教えてくれた人が居て。S 先生なんですけど、その人と出会ったのは高校の時の留学のプログラムがあって、そこで 9 ヶ月間の英語学習とか国際交流とかを学習するために組まれたものがあるのですけれど、そこで S 先生と会って、S 先生も気付いていたのですけれど、自分自身はまだ葛藤中の時期で、S 先生がゲイということも知らないまま普通に接していたのですよ。

あるときに何かドラッグクイーンのショーに連れて行かれて、ゲイである自由さとか美德というか、“こういうのもあるんやで”と教えてくれた人なので、それが初めての出会いかな。

【インタビュアー】

ふうん。

【りゅうせいくん】

それ以外で言ったら、タイでニューハーフのショーとかを観たことありますけれど、そのときはショーとして観ていたので、ゲイとかクイアの人としゃべったとかコミュニケーションを取ったというレベルではなかったの、はい。

【インタビュアー】

S 先生というのは高校の先生？

【りゅうせいくん】

高校のサタデースクールとかじゃないですけど、週に一回のレッスンがあって、そこで英語を教えてくれたのかな？留学をするためのアドバイスとか企画してくれた人なので。

【インタビュアー】

その中でドラッグクイーンのステージとかも連れて行ってもらった。

【りゅうせいくん】

もらいましたし、実際、アメリカのサンフランシスコに 2 週間ぐらい留学したのですが、そこでカストロストリートというところまで行って、普通の道で男性同士が手を繋いだり、ハグしたり、そういうのがあってもみんな受け入れている。白い目で見ないという場所を知って、何かすごく視野が広がって、「別に言って良いんや」と思いました。

それまでは黙らないと後ろ指を指される対象にとか、ちょっと害虫的な駆除対象になるものだと思っていたのですよ。もしくは少しピエロ的な感じなのか。何かそういう生き方しかないと思っていたのですが、日本で特にゲイとして生きるという意味では。でも、2015 年から変わったのかな。

アメリカが同性婚を合憲すると世界中に広まったときに、やはり何か日本もある程度影響もあって、何か LGBT の認知がすごく高くなったので。もう何か自分の時代やなって感じがしました(笑)。

【インタビュアー】

ふうん。すごい、貴重な体験。

【りゅうせいくん】

うん、そうですね。初めてのアメリカ留学はそんな感じでしたけれど、実は、2 回目の留学はその反対だったのですよね。

【インタビュアー】

うん。

【りゅうせいくん】

大学 2 年の時にニューヨーク州立大学で 1 年交換留学したのですが、留学した年がトランプ政権の年で、すごく人種差別とか、白人至上主義まではいかないですけれど、そういう政治がすごくピリピリしていたときだったので、そのときの学生も何かすごいセンシティブというか、言葉を選ばないと自分も怪我をするのと違うかなというときだったので、ゲイとしてカミングアウトしたかったけれど、でも、カミングアウトしすぎると狙われるとか、ちょっと後ろからナイフで刺されるのと違うかとか、現にそういう報道もありましたし、ゲイというだけで痛い目に遭うような環境なので、怖い時期もありました。

【インタビュアー】

ふうん、すごいね。2 回の留学でそれぞれの経験をするという。

【りゅうせいくん】

そうですね、言われてみれば。言葉にして今気付きましたけど(笑)。

【インタビュアー】

(笑)。なるほど。

じゃあ、大学生活としてはサークルと留学と友達関係とかそういうので色々。

【りゅうせいくん】

そうですね、社会人になってからもあんまり人を選ばずに言えるようになりました。

カミングアウトをすることに対する意識の変化

【インタビュアー】

それは何かきっかけや意識の変化はあったのですか？

【りゅうせいくん】

なんやろな。でも、一番は親ですかね。親に自分のキャリアとか進路で迷ったときに「割と誰も一人ひとりのことは見ていないよ」と言われてすごくほっとしたのですよね。

だから、自分がゲイでも周りの人は自分のことで手一杯だから、そんなに気にしなくても良いんだと思って。勿論程度はありますけれど、カミングアウトすることにも何か躊躇はしなくなりました。

【インタビュアー】

親はりゅうせいくんがゲイだってことは知ってたりするの？

【りゅうせいくん】

気付いてはいると思うのですがけれど、お互いあんまり会話にはしないようにしていて、父親は特に反対はしないけれど、自分の子どもが元気であれば何でも良いみたいなスタンスなので、結婚とか恋愛のこととかはあん

まり言わなくなりましたね。

【インタビュアー】

昔はよく言われたの？

【りゅうせいくん】

うん。でも、23、4 の時にそろそろ結婚とか彼女作りやと言われたことあって、自分がちょっとブスだったので。今は聞かれなくなりましたが。

カミングアウトをして良かったこと、悪かったこと

【インタビュアー】

なるほど。

カミングアウトに関してちょっと聞きたいところがあって、男友達、女友達にカミングアウトしていったりとか、社会人になるときにカミングアウトを積極的というかする機会が増えてきたという話があったと思うのです。してよかったこととか悪かったことは？

【りゅうせいくん】

よかったのは、より自分らしくなったとか、自分らしくなるためにダンスだったり、本当に肌に合うゲイの友達とか LGBT の仲間ができたのはすごく大きくて、学生時代も LGBT サークルとかコミュニティとか頑張ったのですけれど、やはり LGBT の中でも色々な人が居るので、話が合う人と合わない人が居て、そのときも“ええ、なんでこんなマイノリティの人たちと仲良くしなければいけないの”というプレッシャーがあったのですけれど、でも、社会人になって、別のコミュニティに触れることで、話しやすい人ができたりしました。カミングアウトしてよかったなと思ったのはそこですかね。多分カミングアウトしていなかったら同じ大学出身でも一生会うことないかもしれないです。

デメリットは、ちょっとカミングアウトして、どこまでさらけ出して良いのか

が分からなくなったぐらい。社会人になってあんまりオープンすぎるとTPOをわきまえろとかというケースもあって、どこまでして良いのかが未だに分かりません。

恋愛の話においても、例えば「ゴリラみたいな人が好きです」は OK だけど、でも、「でっかいちんこが好きです」と言ったらアウトとか。

【インタビュアー】

ああ、なるほど、相手が。

【りゅうせいくん】

相手の免疫力を見ないと言えなくなったのは少し難しいですね。

【インタビュアー】

なるほど。

【りゅうせいくん】

海外勢も免疫がない人はたまに居ますけど、基本日本に居る海外勢は割といける口が多いので、言うのはあまり躊躇ないんですよ。

【インタビュアー】

うん、うん。

【りゅうせいくん】

日本人勢でインターナショナル色、海外色の強い人は言えるのですが、そうじゃない人にはきれいぶってます。なんだかんだ言って優しさだよねって言っています。(笑)

【インタビュアー】

(笑)。

【りゅうせいくん】

なんやろ、自分の問題なんですけど、セクシュアリティというよりかどこまで恋愛の価値観とか人間の価値観の話に対日本人相手にして良いのかが分からない。多分一番きれいな言葉だと思います。

日本人自身も多分あんまり自分のことを話さないというか、話す機会がないから言語化するのがすごく苦手で、だから、自分も話すときこういうことを言って良いかすごく迷うのですけれど、自分は勝手に国民性かなと思っています。会社でイケメンマッチョのカレンダーを飾っていたのです。そのときにすごく仲の良いチームの人に、ちょっとさすがにこれはきついと言われました。

でも、それは、よくよく考えたらノンケでももしビキニの美人女性のカレンダーを飾っていたら引くというのとあまり変わらないのかなというていで考えたら、まあ自分はキモいことをしていたかもしれない。

それは失敗って感じはします。おとなしく家で飾っておけばよかったなと思います。

【インタビュアー】

社会人になってつながりが多くなったというのはどういうところで？

【りゅうせいくん】

うん、そうですね。今やっているダンスの VOGUE というのはもともとゲイのコミュニティが作ったジャンルなので、やはりそこを通してすごく絆というか、コネクションはすごい深まったので、自分はカミングアウトして得したほうだと思います。

ただ、もし自分が違う仕事の業界に入っていて、すごいドメスティックな環境に居たら多分全く違うことをしていたと思う。

現在について

【インタビュアー】

なるほど。

今勤めている会社の人とかは、どれぐらいカミングアウトしているの？

【りゅうせいくん】

女性社員は全員知っていると思います。

【インタビュアー】

会社に何人ぐらい居るの？

【りゅうせいくん】

会社自体は 40 人ちょっとなので、30 人ぐらいは知っていると思います。

【インタビュアー】

何か仕事をする上でセクシュアリティに関わって苦勞することとか、そういうことはありますか？

【りゅうせいくん】

何か新聞とかメディアの言うほど自分は苦勞はしていないし、自分の偏見かもしれないですけど、変に自分のセクシュアリティを隠したり、ノンケ社会になじもうとしているから余計にしんどいのと違うかなと自分は勝手に思っていて、自分はさらけ出して危険なことはしてほしくないのですけれど、違う形で自分らしく居られるのだったらそっちの方が僕じゃない？というのが自分は思うことで、そういう環境を選ぶのも最終的に自分じゃないですか。こんな言い方をしたらすごく語弊があるかもしれないですけど、ゲイとか LGBT としていじめられるような環境に置いている自分も悪いのではない？と私は思うのですけれど。自分がハッピーになれ

る場所があるのに何で探さないのだろうと思います。自分も探すのにすごい苦労しましたけれど。

【インタビュアー】

自分がカミングアウトするというのは環境に影響があるということかな？

【りゅうせいくん】

うん、そうですね。日本のゲイの子は全員ではないけれど、すごい息苦しそうに感じますけれど。

【インタビュアー】

カミングアウトを積極的にしていくのは、きっかけとしては環境？誰かに何かを言われたとか？

【りゅうせいくん】

誰かというか何か、やはりアメリカに居たからかもしれないですし、インターナショナル・スクールに行って勉強していたというのもあるのですが、やはり自己表現とかすごく大事な環境に居たので、自分のことをさらけ出さないと誰も気付いてくれないし、溺れてしまうという考え方が強いところに居たので。

【インタビュアー】

あっそうだよね、両親からも言われたという話もあったね。

【りゅうせいくん】

日本で協調性ってすごく大事じゃないですか。あんまり「自分が、自分が」といったら波風立つのであんまりそういうのは好きじゃないという人も多いと私は勝手に思っているのですが、ごめんなさい、また、質問ずれましたね。

【インタビュアー】

あっても大丈夫よ。今までの文脈で非常によく分かる。

読者へメッセージ

【インタビュアー】

現役生に対して何かメッセージみたいなのはある？関学でも良いし、今から就職する、就活する人でも良いし。

【りゅうせいくん】

やはり大学って自分を探すすごく良い機会だし、良いことも悪いこともたくさんあると思うけど、でも、それは結果的に社会人になったときにすごく貴重な体験になるし、どう生きるかは分からないけれど、でも、後悔はしないと思うのでとりあえず色々チャレンジしてください(笑)。

自分はダンスとか趣味というところで自分らしさを探ることができたので、みんなも何かしら自分らしさを探せたら良いなと思います。

【インタビュアー】

ありがとうございます。

僕からの質問は以上なのだけれど、りゅうせいくんから何か少し入れておきたいなとか、少しここを補足しておきたいなとか、もう少ししゃべりたいなみたいなものとか。

【りゅうせいくん】

でも、最後の補足じゃないですけど、周りに後ろ指指されても、何をやっても後ろ指を指されるからあまり気にしなくて良いよ、ぐらいかな。

【インタビュアー】

なるほどね。

【りゅうせいくん】

逆に、それを見て支持する人も出てくるし。怖くないよ。それぐらいかな。

以上